

宋版「宗鏡録」「中阿含経」の発見

——愛媛大学附属図書館蔵鈴鹿文庫の一宝典——

加藤 国安

はじめに

愛媛大学附属図書館には、「鈴鹿文庫」と称される文化財七千四百余点が所蔵されている。その委細については、同大学の古典文学担当・福田安典氏（現教授）の「愛媛大学鈴鹿文庫・鈴鹿連胤関係資料について」（『国文学研究資料館紀要』第二八号 二〇〇二）に譲るとして、いま簡単に紹介すると、香川景樹門下の歌人・鈴鹿連胤（一七九五—一八七〇）という蔵書家としても有名な人物がいた。その連胤の別家・鈴木義一旧蔵書の多くが、戦後、近畿日本鉄道により購入され（昭和二一年、同社編「編纂室蔵書目録」が刊行されている）、昭和三六年には大和文華館に一括移管された。これを「鈴鹿文庫」という。一方、連胤の曾孫である鈴鹿三七氏も蔵書家として聞こえ、連胤以来の蔵書を有し、京都大学で国文学を専攻、皇学館教授などを歴任。関西書誌学界の開拓者と称えられたが、昭和四二年、七十九歳で逝去。その夫人が、元愛媛大学附属図書館長井手淳二郎の妹という縁により、三七氏の蔵書分が一括同大学に購入（一部寄贈）されることになった。これが「愛媛大学附属図書館蔵鈴鹿文庫」と称されるものである。「鈴鹿文庫」は、二つの所在地に分散しているわけだが、拙稿で扱うのは後者の方である。

その概要だが、近世期から明治にかけての神道関係や和歌・物語・

随筆・日記のほか、漢籍も含む写本・版本が所蔵されている。中には岩波の古典文学大系の底本となった「大和物語」や、近世の有職故実の基本資料である「日次日記」などの稀少本もあり、かねてより専門家らの関心は高かった。しかし、地方にあることや閲覧の制限などもあって、研究者に十分活用されることはなかった。そこで、この数年、同附属図書館では国文学研究資料館とも協力してその整理・保存に努めるかたわら、デジタルコンテンツ化を推進し一般公開に腐心してきた。さらに平成一六年三月、日本史・国文学・国語学・書道・漢文学関係の研究者九人からなる「鈴鹿文庫」目録専門部会を発足させ、本格的に活動を開始したのである。

部会長は、前述の福田助教授（当時）が当たられた。私が仰せつかったのは漢籍の調査である。図書館が作成した「鈴鹿文庫一覽」という仮目録では、「漢籍」に分類されるのは二十七点あるが、じつはそれ以外にも漢籍はあり、たとえば「近藤篤山先生集」（弘化四年 星輝堂主人）という写本もある。本書については、以前、拙著『伊予の陶淵明 近藤篤山』（研文出版 二〇〇四）で取り上げたのでここでは省くが、江戸期に刊行されたいわゆる国書漢籍もそれなりに所蔵されている。中には気になる書籍もあったのだが、福田部会長がとくに気にされたのは、かねてより宋版と伝承されてきた「宗鏡録」「中阿含経」の確認作業だった。

漢籍とはいっても、論者の専門とする漢詩文集ではない。勝手の手分からぬ仏典であるゆえ、はじめ気乗りはしなかったが、同大学法文学部で中国思想(禅関係)を専門とする邢東風助教(調査当時)と親交があったこともあり、協力をお願いして調査に当たることとしたのである。その結果を以下にご報告する。

一 「宗鏡録」巻二と金沢文庫

まず「宗鏡録」について見ていく。書名は、「すぎよろろく」と読む。「宗鏡録」は、中国の五代十国の呉越から北宋初の僧、永明延寿が撰した仏教論書で全百巻、九六一年の成立である。延寿は雪峯義存の弟子である翠巖令参のもとで出家し、天台徳韶の嗣法となった禅僧である。本書は、その延寿の主著である。内容は、禅宗をはじめとして唯識・華嚴・天台の各宗派の著作よりその概要を抜粋し、これをもぐって各宗の学僧に相互に質疑応答させ、最終的には「心宗」によってその統合をはかるという構成になっている。この延寿の総合化の姿勢は、「万善同帰集」にも見られるものであり、後世になって「禅浄双修」「教禅一致」が提唱された時に注目されることとなった。『大正新脩大蔵経』では、第四八巻「諸宗部」五に収録されている。

愛媛大学蔵鈴鹿文庫の「宗鏡録」は、そのうちの巻二である。では鈴鹿三七氏はどこからこの宋版を入手したのか。これについて今回はじめて本格的な調査が行われたわけだが、委細は後述するとして結論からいえば、金沢文庫蔵(神奈川県横浜市)のものを入手したと確認するに到った。いつ頃、鈴鹿三七氏がこの宋版「宗鏡録」巻二を入手したのかだが、これは不明である。今言えるのは、昭和九年発行の「書誌学」二ノ五〇六に、当時金沢文庫長だった関靖博士の「金沢文庫書誌論考」(『金沢文庫研究紀要』第二号)のち「金沢文庫

本之研究」に所収 日本書誌学大系十九 青裳堂書店 昭和五六年)が掲載されているが、その中にすでに鈴鹿三七氏所蔵の宋版「宗鏡録」巻二が、もとは金沢文庫の宋版「宗鏡録」全百巻の一部だったと言及されることである。これによれば昭和九年以前のことであるのは確実だが、それ以上のは分からない。

その金沢文庫とはどんな図書館か。周知のことではあるが概述しておく。すなわち鎌倉中期の武将、北条実時(一二二四(元仁元年)～一二七六(建治二年))が建設した武家の私設文庫である。北条実時は文化人として知られるとともに、八代執権時宗の補佐役としても有名な人物。建設時期は定かでないが、一二七五年(建治元)頃ではないかとされる。北条氏の滅亡後は菩提寺の称名寺が管理を引き継いだ。当時の建築物は現存せず、発掘調査と当時の記録からその位置が推定されている。一八九七年(明治三〇)、伊藤博文らによって金沢文庫が再建されたが、関東大震災で焼失。一九三〇年(昭和五)、神奈川県運営する文化施設として復興された。

次に、この宋版「宗鏡録」全百巻は、どうして金沢文庫に収められたのかだが、弘長元年(一二六一)、北条実時が真言律宗の称名寺に寄進したことによる。以来、七四五年の歴史を今に伝えている。その北条実時は、どうやってこの宋版「宗鏡録」全百巻を入手したのか。称名寺第二代長老の劔阿の筆録「一切経表白文」によると、北条実時が当時の高僧だった奈良西大寺の観尊長老の鎌倉下向を実現させるために、常陸小田の三村山清涼院の住僧定舜を中国に入宋させて求めたものとされる。この宋版「宗鏡録」全百巻は、その定舜が将来した「一切経」のうちの一部なのである。

今日、金沢文庫所蔵の宋版一切経は、平成五年から八年にかけて本格的な調査が行われ、一〇年には国の重要文化財の指定を受けている。その詳しい調査結果は、「神奈川県立金沢文庫保管宋版一切経目

録」(一九九八)に記されるが、誤植も少なくないので注意が必要である。

二 崇寧藏と毗盧藏

当時、中国から称名寺に将来された宋版一切経は、六千帖を超える数量だったとされるが、現在、金沢文庫蔵として確認されているのはその半分で、内訳は福州東禪寺版を中心に、福州開元寺版・湖州思溪版で、計三、一〇一帖(字音釈二二九帖を含む)がある。版ごとに帖数を示すと、

- ①福州東禪寺版(崇寧藏) 九七八帖
- ②福州開元寺版(毗盧藏) 二、一一六帖
- ③湖州円覚寺版(資福藏) 七帖

である。ちなみに、金沢文庫の一切経は、これらのほか和版・写本も加えて三種五類で構成される全三、四八六帖(音釈を含む)である。

愛媛大学蔵宋版「宗鏡録」卷二は、このうち②開元寺版である。

その東禪寺版とは何かだが、宋版大蔵経の重要な版本の一つなのであるけれども、その特色を理解するには、まず宋版大蔵経の概略を知っておく必要がある。この方面で最も明快な理解を提供してこられたのは、竺沙雅章博士(京都大名誉教授)である。いま博士の「宋元版大蔵経の系譜」(『宋元佛教文化史研究』汲古書院 二〇〇〇)をもとに概説することにする。

「大蔵経」というのは、文献上は中国の隋代から現れてくる言葉で、それ以前は「一切経」が一般的だった。四世紀頃から写経が徐々に進行するようになり、五世紀後半には国家的事業として盛んに「一切経」

の写経が行われた。写経のスタイルは、はじめ一行が一六字〜二二字と幅があったが、五世紀末にはほぼ一行一七文字と固定してくるようになる。唐代では、国営の写経所を宮廷内に設置し大がかりで書写し、それを全国に配布した。教典が大部なものになってくると、当然目録が必要になる。そこで道宣の著した「大唐内典録」や、智昇の「開元釈教録」が登場する。この「開元釈教録」は開元一八年に著されたもので、計五、〇四八卷四八〇帙を数える。これにより経典の目録(「経録」という)が完成。これより以後、すべての仏典にこの巻数が付けられることになるが、加えて番号も付けられた。それは千字文の順により、「天地玄黄、宇宙洪荒」というふうには、帙(函)ごとに漢字一字を付ける形をとった。これを「千字文帙(函)号」(中国語では「千字文編号」と呼ぶが、中国の大蔵経史研究の第一人者・方広錫氏(中国社会科学院世界宗教研究所教授、現在は上海師範大学教授)によると、時代的には九世紀の晩唐頃からと考えられている(『八十世紀仏教大蔵経史』一九九二)。ただこの「千字文帙(函)号」だが、版本の種類により少しずつずれている。このずれに着目したのが竺沙博士だった。

宋代、大蔵経の印刷が開始され、元代にかけて印刷された大蔵経は、計一〇種類にのぼる。それをどう分類するのだが、今日、竺沙博士のものも最も有効な説明とされている。博士は版式(一行何字か、巻物かなど)や千字文番号の違いにより、次の三つの群に分ける。

一、第一類蔵経

每版二三行、一行一四字、だいたいは卷子本(巻軸装)。蜀版、

あるいは勅版ともいう。現在、世界に八点のみ残存。中国六点、

日本二点(南禪寺・書道博物館)。開宝五年(九七二)から太

平興国二年に成都で開版、その版本が太平興国八年(九八三)、

太宗皇帝に進呈。開封の印経院で印刷さる。日本・高麗にも下賜さる。帙(函)号は、「開元釈教録略出」より一字繰り上げ。

二、第二類蔵経

每版二七、二八行、一行一七字、卷子本。帙号は、「開元釈教録略出」より一字繰り下げ。契丹蔵、あるいは遼蔵ともいう。長年、幻の大蔵経と見なされてきたが、一九七四年、山西の応県（今山西臨猗）の佛宮寺の釈迦像の体内から一〇点（七巻とも一二点ともいう）の残巻が発見。これは開宝蔵とは無関係に、唐代の長安で行われた写本により燕京で制作されたもの。

三、第三類蔵経

每版三〇行、一行一七字、折本帖（経折装）。帙(函)号は「開元釈教録略出」と同じ。江南諸蔵と称され、福州の二種類（東禪寺版・開元寺版）、湖州の思溪版・平江（蘇州）の磧砂延聖禪院版（磧砂蔵）、杭州の普寧寺版などがある。日宋貿易や日元貿易により、わが国に大量にもたらされた。日本にある宋版大蔵経のほとんどが、この江南諸蔵版である。

以上を踏まえた上で、東禪寺版に即して見ていこう。これは江南地域で彫印されたものとしては最初のもので、北宋・神宗の元豊三年（一〇八〇）から徽宗の政和二年（一一一一）にいたる三十余年の間に、福州の白鳥山東禪等覺院で、住持の慧空大師冲真の発願のもと、官僚・道俗ら多くの人々から浄財を募って私版の一切経として開版された。その巻数は五千七百余巻を数える。

その書型は前述したように、一紙に三〇行または三六行、天地に界を設け、毎行一七字詰、一面（半葉）六行の折本帖となっている。巻首はおおむね「福州東禪等覺院住持……」の書き出しで始まり、三行または四行からなる開版の趣旨や、刊行の年次を明示した「題記」が

刻まれている。これが福州版の特色である。愛媛大学所蔵宋版「中阿含経」巻五六は、この①東禪寺版系（崇寧蔵）である。

次に、開元寺版だが、これは東禪寺版に次いで開版されたもので、政和二年から南宋・高宗の紹興二年（一一五二）にかけて、福州の東芝山開元寺で住持の慧通大師本明の発願のもと、官僚や僧俗らから浄財を募って着工された。書型の行款は東禪寺版と同じく一紙に三〇行、毎行一七字詰、一面六行の折本帖である。また「題記」も同様に刻まれている。福州で二蔵も造られた理由だが、当時、この地は仏国と呼ばれるほど仏教が盛んで、寺院が豊かな財政基盤を有していたこと等による。

ただし、東禪寺版・開元寺版ともに大量に印刷されたため版木の摩耗がいちじるしく、紹興年間以降、部分的な補刻が行われた。その場合、題記がないものが作られた。愛媛大学所蔵の宋版「宗鏡録」巻二二はこれにあたる。ただ題記がないゆえに、東禪寺版・開元寺版の区別がつかず、あるいはその他の版の可能性もある。

ちなみに、金沢文庫蔵の宋版「宗鏡録」全百巻だが、このうち巻九・一一・一三・一七・二五・二九・三一・三八・四〇・四二・四四・四六・四七・四九・五二・五七・六一・六四・六五・六七・七〇・七一・七三・七六・七八・七九・八二・八六・九〇・九一・九三・九五・九六・九八・九九は欠である。これらを除いた巻数を所蔵するが、同文庫の調査によりすべて開元寺版であることが確認されている。では、愛大蔵「宗鏡録」は、本当に開元寺版と断定してよいのだろうか。論者はなお慎重に調査を進めていった。

これと並行して、愛大の邢東風助教授が中国社会科学院世界宗教研究所の何梅教授に問い合わせたところ、次のような説明を寄せてくれたので、以下に掲げさせていただく（原文、中国語）。

宋版「宗鏡録」卷二二は、「崇寧藏」に引き続いて福州で彫られた「毗盧藏」のものに相違ない。この巻は千字文の「富」字函に所属しているが、これは「崇寧藏」と「毗盧藏」にしか見られない。『東寺経藏一切経目録』の記録によれば、「崇寧藏」の「宗鏡録」卷二二は、大観元年（一一〇七）八月に刊行されているので（No七 P八一九）、かりに「崇寧藏」のものであるならば、巻首には刻版の題記があるはずである。さらに『宮内庁図書寮一切経目録』（No六 P七八六）を調べてみると、その「富」字函にはこの巻がある。しかし刻版の題記はない。ちょうどこの経巻と同じである。

また宮内庁図書寮には、ほぼ完備する「毗盧藏」を一セット保存している。巻首の折りには彫刻者の名前の「盈」字があり、巻末の折りには彫刻者の名前の「元」字がある。いずれも他の「毗盧藏」本に登場する刻工者の名前である。

まさに竺沙博士の千字文帙（函）号による分類がいかにも有効であるかの例証となるものである。なお何教授の説明に一つ補足するならば、なぜ開元寺版を毗盧藏と呼ぶかについては、以下のような資料がある。

福州開元禪寺住持伝法賜紫慧通大師一、謹募衆縁、恭為今上皇帝祝延聖寿、文武官僚資崇祿位、圓成雕造「毗盧大藏經」板一副。

時紹興戊辰閏八月日謹題。

これは「大周刊定衆経目録」卷一の巻首の題記だが、この毗盧藏は巻首に題記を掲げるのが常である。これによると、「衆縁を募り」ま

た今上皇帝の「聖寿の延びんことを祝い」、加えて文武の官僚らのお布施により、この「毗盧大藏経」を紹興戊辰（一一八一―一一四八）に完成させたという。

では、もう一つの「崇寧藏」とは何か。これについても、何梅教授から丁寧なご説明をいただいた。少し長いが引用する（原文、中国語）

現存の宋版・明版大藏経は、一般には、経版の彫刻を終えた後、引き続き刊行して經典を新しく編入したり、あるいは数十年後に破損した経版を補修したりする場合がある。「崇寧藏」も例外ではない。

「崇寧藏」は、北宋の元豊三年（一一〇八）から政和二年（一一一三）まで刊行され、全部で五六四函あった。しかし、この藏経の一部は南宋の建炎二年（一一二八）六月から三年（一一二九）二月までと、紹興四年（一一三四）と同二六年（一一五六）に補って彫刻している。基本的な部分を全部完成したのは、崇寧二年（一一〇三）であり、その時「崇寧万寿大藏」の名を賜っている。

「崇寧藏」は、北宋の嘉祐七年から南宋の淳熙三年まで（一一〇六―一一七六）の間に、勅命によって新たに編入を許可された禅宗と天台宗の一八函の撰述を引き続き刊刻した。

「崇寧藏」刊行の半世紀後、経版がすでに破損してしまったので、南宋の紹興二六年から元代までに破損した経版について、大きな補修を三回行った。第一回は紹興二六年から二八年までの間で、第二回は南宋の寧宗の慶元二年（一一九六）前後で、北京国家図書館所蔵「轉婆沙論」卷九の折りには「賈侍郎舍」、「慶元丙辰」、「比丘法悟銭開板」の字があり（慶元丙辰の明確な年代は、私が考察したときに発見したもの。すでに李富華と私の共著「漢文仏教大藏経研究」に収められている）、アメリカ・ハーバード

燕京図書館所蔵の「十誦律」卷二三の折りには「安撫賈侍郎舎」、
「広東運使寺正曾噩舎」の字がある。

「崇寧蔵」を最初に彫刻したとき、折りのところには千字文の
函号・巻号・紙の枚数番号、及び刻工者名などを一行内に小さな
文字で記し、巻末の空白のところには用紙の枚数及び刻工者名・
印刷者名だけを刻んだ。他は刻まれていない。したがって、上述
の折りのところに刻まれた字は、いずれも後に経版を補修する時
刻み込んだものであると判断できる。第三回の補修は元の至治元
年から泰定三年（一三二一〜一三二六）までの間である。東禅寺
経版は、元末至正二年（一三六二）に兵火によって寺とともに
破損してしまった。

ちなみに、日本に所蔵される「崇寧蔵」の所蔵状況だが、『東
寺経蔵一切経目録』には、ほとんど完備した「崇寧蔵」が収蔵さ
れている。そのうち、「似」字函にはこの経巻が入っている。ま
た小野玄妙博士の調査によると、日本に保存されるものは、混合
本の福州蔵で全部で五〜六セットあり、収蔵するところは宮内庁
図書寮・京都上醍醐・高野山勸学院・知恩院などである。ほかに
南禅寺・京都の教王護国寺・横浜の金沢文庫・同朋学園にも一部
所蔵される。以上の各所の収蔵目録は、『昭和法宝総目録』No六
―No一〇、No七 P八〇四に見られる。中国国内に現存する「崇
寧蔵」経巻は、私の知っている限りでは一〇〇巻にも満たない。

以上、「崇寧蔵」についての何氏の知見を紹介した。これについて
は、後日、方広鎰先生からも何氏の鑑定を確認したというメールをい
ただいた。これに少し補足すると、「崇寧蔵」はその行款（文字の書
写や排列形式など）・版式・大小・装幀などの形態において、中国大
蔵経の発展に大きな影響を与えたのだが、惜しむらくはそのほとん

どが中国国内には伝わらず、主に日本に伝来した。したがって中国か
ら見ると、日本人が考える以上に文物的な価値はきわめて高い。今日、
国際的な学术交流の場での研究が不可欠となってきたのであり、
るのである。

崇寧蔵が刻されたこの東禅寺等覚院だが、史書に記載されることは
きわめて稀で、わずかに宋・梁克家の「三山志」卷三三（宋元地方
志叢書）第十二冊などに収録）に、「梁の大同五年（五三九）、州人
の鄭昭勇の宅を捐てて之を為す。白馬上に在り旧名は浄土。：皇朝
の大中祥符八年（一〇一五）、号を東禅等覚と賜う。崇寧二年（一一
〇三）、蔵経を進むに因り崇寧萬歳と加号す。紹興一〇年（一一四〇）、
崇寧萬歳を改め報恩廣孝と為す」と記す。また元の陳高の撰になる「不
繫舟漁集」所収「重建東禅報恩光孝寺記」には、「東禅は福州城東三
百歩に在り。郭に倚り市に近く、而して左右に乃ち山を背負ひ、林麓
は遼幽にして、是れ仙佛の宅する所に宜し」（『元人文集珍本叢刊』）
と記される。文献上はこの種の寺院史のみで大蔵経の印刷に関する記
録は何もない。

この間の経緯が分かるのは、崇寧蔵「大般若波羅蜜多経」卷一の経
首の部分による。今その一部を書き出すと（―この部分の全文が、李
際寧著『中国版本文化叢書 仏教版本』（江蘇古籍出版社 二〇〇二）
などに紹介されている）、

礼部員外郎陳陽白札子、竊見朝廷近降指揮天寧節天下州軍各許
建寺、以崇寧為額、仍候了日、賜經一藏。契勘大蔵経、唯都下有
板、于是親為勸首、于福州東禅院勸請僧募衆縁、雕造大蔵経板及
建立蔵院一所、欲乞勅賜東禅院蔵以崇寧萬壽大蔵為名、候指揮、
牒。

奉勅 宜賜崇寧萬壽大蔵為名、牒至准勅、故牒。

崇寧二年十一月二十二日牒

朝廷は天寧節、すなわち徽宗の誕生日である一〇月一〇日、「天下の州・軍」(一宋代の地方行政の単位で、州の上が府で軍の下が県・鎮になる)に寺の建立を認める勅令を出し、崇寧年間をかぎって造宮が成った日に経一藏を賜うとした。しかし、当時の大藏経は開封府の「開宝藏」しかなく、全国各地の寺院の求めには対応できなかった。そこで福州の東禅院の僧が喜捨を募り、別の大藏経を開版することになったという。かくして礼部員外郎陳暘ちんやうが朝廷に上奏して、東禅院の大藏経を「崇寧萬壽大藏経」としてくれるよう陳情したのに対して、朝廷がこれを許し、その名が与えられたという。またこの記述によると、「三山志」が崇寧萬歳とするのは崇寧萬壽の誤りであることも分かる。

三 金沢文庫の宋版「一切経」の版本と愛大蔵「宗鏡録」 卷二二

では、称名寺の宋版一切経は、その後どうなったのかというと、弘長元年(一二六一)、北条実時から称名寺に寄進された後、歴代の住職および住僧らの勉強用のテキストとして活用。鎌倉後期から南北朝の頃までは、「経藏」に保管された。元弘三年(一一三三)、金沢の北条一門は鎌倉幕府とともに滅亡するが、称名寺は寺領を安堵され大切に保管されていたのである。

江戸後期の文政元年頃、江戸の豪商・石橋氏がこれを手厚く保護し修復が行われた。この石橋氏だが、金沢文庫西岡芳文学芸課長にお尋ねすると、浦賀で取引をしていた茅場町の商人、石橋弥兵なる人物とすることである。修理を請け負ったのは、江戸坂本町一丁目の木代藤兵

衛きやうじという経師である。この時、天地が裁断され、原装本(二九・一×六六・七cm)より寸法が短くなった。この石橋氏について、愛媛大学の宋版「宗鏡録」卷二二末尾に、元金沢文庫館長関靖氏の自筆識語がある。

「金沢文庫所蔵宋版一切経之一部 装丁者徳川末□係石橋氏寄進者也 金沢文庫長関靖」

これは昭和九年頃、関氏が京都の鈴鹿三七氏を訪ねたときに記したものと考えられる(前掲「書誌学」二ノ五〇六 昭和九年)。

そこで、本卷二二とセットで収められた金沢文庫蔵宋版「宗鏡録」の現状を把握すべく、論者による現物調査を行うこととした。金庫から運び出していた資料は、一見するだに破損が進んでおり保存状態がよくないことを痛感した。西岡学芸課長も、文化財としての価値の低下を心配、たいへん憂慮しておられた。本家の金沢文庫蔵宋版「宗鏡録」に比べ、愛媛大所蔵の宋版「宗鏡録」卷二二は相当保存状態がよく、同大学附属図書館員が制作したカラー写真帖をお見せすると、西岡学芸課長は、将来ぜひ拝借したいと漏らされたほどである。参考までに、愛大蔵「宗鏡録」卷二二(旧金沢文庫)の書誌情報を記しておく。

外題・題簽 なし

蔵書印 東寺図書(蔵書印の意味は不明。)

装丁 折本

冊数 一冊

書型 縦二八cm、横一一cm

匡廓 上下单边 左右辺なし、行界(罫・界線)もなし

各折 六行×一七字

六折×十二紙+最後の第十三紙は三折(計七五折)

刻工師 紙番号一の版心(盈)、二(林厚)、三(寅?)、四(ナシ)、五(ナシ)、六(莚)、七(仗達)、八(ナシ)、九(盈)、十(習全)、十一(保)、十二(林元)
第十三紙(十三止尾元)

版心の表記例(富 二十一卷 九 盈)(富 二十二卷 十一 保)などと記される。ちなみに、「二十一卷」は「二十二卷」の彫り誤り。

*ここでいう版心だが、通常のような条線はなく、折れ目の芯の左右のわずかな余白部分となっている。「富」は千字文の函号。

四 愛大蔵「宗鏡録」と関連する調査報告

ちなみに、論者が調査した宮内庁図書寮の宋版「宗鏡録」についても記しておく。同図書寮には、ほぼ完備する「毗廬蔵」を一セット保存しているが、巻二は題記なしで三〇×一一cm、大きさは天地が二cm大きい。ただしこれが元の原寸だったことは前述した通りである。

愛大蔵鈴鹿文庫本は、右述したように経師・木代藤兵衛が装丁し直しただけで、版木はまったく同一である。また重文の指定はない。宮内庁の文化財は、国宝・重文の指定を取らないのが慣例と、中村一紀図書課出納長は説明された。じつは中村氏はもと金沢文庫に勤務し、この宋版一切経の重文指定を受けた時の主任を務められた方と、この時お聴きした。中村氏の見立てによると、鈴鹿文庫の方が刷りがきれいなので、宮内庁本より一年くらい前のものではないかとのことだった。また邢東風助教授の調査した宋版「宗鏡録」の概要は、以下の通り。

(1)大阪図書館蔵宋版「宗鏡録」巻二四

千字文函号「富」、全二十紙、紙六折、六行、一七字。なお第十一紙は五折、第二十紙は三折。

刻工師

紙番号一(不明)、二(老)、三(林通刀)、四(郭正)、五(程亨)、六(林又?)、七(ナシ)、八(王景)、九(林士?)、十(厚)、十一(彦)、十二(習全)、十三(正)、十四(才全)、十五(林通)、十六(契?)、十七(王大)、十八(ナシ)、十九(郭正)、

第二十紙(二十紙尾)

虫食いあり、修復済み。

(2)京都大学図書館蔵宋版「宗鏡録」巻六四(谷村文庫)

千字文函号「軽」、全九紙、紙六折り、六行、一七字。

刻工師

紙番号一(井?通)、二(介)、三(厚)、四(ナシ)、五(陳通)、六(陳昌)、七(内?)、八(習全)

第九紙(九止尾帛)

(なお京都大学図書館には、宋版「宗鏡録」巻三六もある。

旧金沢文庫蔵。未調査)

虫食いあり、修復済み。

(3)京都大学人文科学研究所蔵宋版「宗鏡録」巻四七

千字文函号「駕」、全十五紙、紙六折、六行、一七字。

刻工師

紙番号一(仕)、二(忝?)、三(?)、四(?)、五(林元?)、六(廣)、七(知求?)、八(陳昌)、九(陳昌)、十(?)、十一(盛)、十二(盈?)、十三(盛)、十四(李質)

第十五紙（十五紙尾）

虫食いあり、修復済み。

五 愛大蔵「中阿含経」巻五六について

「阿含経」は「あごんぎよう」「あごんぎよう」などと読む。阿含の語源は、サンスクリット・パーリ語のアーガマで、この漢字はその音写である。伝承された教説、またその集成の意味という。紀元前四世紀から紀元前一世紀にかけて、徐々に作成されたものであり、初期仏教の教典である。すなわち釈迦入滅後、迦葉や阿難をはじめとする弟子達によってまとめられた教典の一つである。「中阿含経」とは、「阿含経」のうちで中くらしいの長さの経を収録したものを指し、全六〇巻ある。

では、愛媛大学所蔵の「中阿含経」巻五六は、どんなテキストなのか。まず巻頭に題記がある。それには「紹聖三年五月 東禅寺」と記す。つまり北宋・哲宗の一〇九六年にあたる。縦二八×横一一cmで、「三聖寺」という二重丸の朱の蔵書印がある。この三聖寺だが、京都市東山区にあった寺院で鎌倉初期の建立。現在は、愛染堂（室町時代建立、禅宗様。東福寺山内）が残る。開創時（一二四九〜一二五六年頃）に、沙弥行蓮によって一切経が納められたが、一八〇八年、三聖寺の経蔵を撤去した際に、近江の学僧・佐々木海量が所有することとなり、その後各所に分散したと見られている。愛媛大学所蔵のものはその中の一巻である。また「三聖寺」朱印を捺印する「崇寧蔵」本は、北京大学図書館および米国・ハーバード大学燕京図書館にもある。たまたま論者が、中国印刷文化の大家・張秀民著『挿図珍藏増訂版中国印刷史』（浙江古籍出版社 二〇〇六）上巻を読んでいた時、前者の図版が六五頁に掲載されていることに気づいたので、ここに紹介

しておく。

では、いつ刷られたのかだが、東禅寺と題記があることから崇寧蔵系だが、題記通りの紹聖三年のものではなく、後に補修されたものと思われる。その理由は、「広東運使寺正曾噩」の名が幾所かに見えることによる。今それをすべて列挙すると、

- 紙番号四の版心 ↓（広東運使寺正曾噩捨）
- 六の版心 ↓（広東運使寺正曾噩捨）
- 七の版心 ↓（広東運使寺正曾噩捨）
- 八の版心 ↓（広東運使寺正曾噩捨）
- 十四の末尾 ↓（広東運使寺正曾噩捨）

この曾噩（？〜一二二六）とは、一二〜一三世紀の南宋の人物で、字を子肅といい福建の閩県の出身、熙寧四（一一九三）年の進士である。その事跡は、陳宓「復齋集運判曾公墓誌」に詳しい。漢詩に詳しい人なら、郭知達輯の宋刻本「九家集注杜詩」の重刻者として有名な人物であり、また同本がわが国の静嘉堂文庫に所蔵されることもあつて、その名を知っている方もあろう。一方、東禅寺版の二回目補修が行われたのが、寧宗の慶元二年（一一九六）前後とされるから、曾噩の生没年から類推しておそらくその頃印刷されたと考えられる。すなわち崇寧蔵系の南宋改修版と断定できるのである。

ちなみに、曾噩という名は、他の仏典にも見えている。たとえば、「首楞嚴経義海」巻二七巻尾の題記にいう、

朝議大夫広南東路転運判官曾噩、敬施俸資、就東禅大蔵経板内、
揀出朽蠹漫滅、有妨看誦者、重加刊換、永久流通。

宝慶貳年丙戌四月日謹題

つまり、曾璽がお布施を提供して東禅寺の大蔵経の中で、虫食いにやられ破損状態がひどく、「看誦」の妨げとなっているものを選び出し、もう一度補修して重刊し末永く出回るようにしたものだという。「宝慶貳年」とは、一二二六年にあたる。

参考までに、愛大蔵「中阿含経」巻五六の書誌情報を記しておく。

外題・題簽なし

見返し なし

蔵書印 三聖寺 (折れで数えて一・四一・八二の三箇所)、二

重丸の朱印)

装丁 折本

冊数 一冊

書型 縦二八cm、横一一cm

匡廓 上下单边 左右辺なし、行界(罫・界線)もなし

各折 六行×一七字

刻工師

紙番号一、二の版心(似・六卷 陳廸刀)、三(陳廸)、

四(祐)、五(陳廸)、六(宗)、七(祐)、八(昌)、九

(太)、十(太)、十一(不明)、十二(不明)、十三(丁

亥方)、十四(先)

第十四紙の末尾 「十四昏尾」(紙終りの意)

版心の表記例 (似・六卷 四 祐) (似・六卷 十 太) などと

記される。ちなみに、「六卷」は「五十六卷」を

略して彫ったもの。

巻首題記「福州東禅等覚院住持○○沙門智賢謹募衆縁恭為

今上皇帝祝延 聖壽闔郡官僚同資禄位雕造」

大蔵経印板計五百餘函 時紹聖三年五月 日謹題

中阿含経卷第五十六 「東禅経局」の印 似

...

葛紹印造

六折×十三紙十最後の第十四紙は四折 (計八二折)

六 その他の宋版「中阿含経」の調査結果

論者は金沢文庫の宋版「中阿含経」を調査、その結果、金沢文庫には巻五六が架蔵されており、愛大蔵本が金沢文庫からの流失でないことを確認した。版木は愛大版とまったく同一で、天地が裁断されて二八×一一cmである。金沢文庫の朱印があり、国の重文指定を受けている。ただし、保存状態は愛媛大学蔵の方が良好である。カラー写真を見た西岡芳文学芸課長は、これも将来ぜひ拝借したいと述べられた。

また宮内庁本も調査、これには題記はなく、縦横は三〇×一一cmで題記がない以外、版木は愛大版と同一だった。

ところで、わが国の宋版「中阿含経」の所蔵先を調査していく過程で、その中に愛知県の本源寺の名が見つかった。それを同僚の邢東風助教授に調査してもらったところ、その内容が愛大版と同系列のものであることが判明。すなわち本源寺蔵の「中阿含経」にも、「広東運使寺正曾璽」の名が見えるし、「三聖寺」の二重丸の朱印も同一だったのである。以下、その調査結果を要約する。

本源寺は宋版一切経を二千二百余帖(東禅等覚院と開元禅寺の混交)を所蔵。前述のように近江の学僧・佐々木海量の覚勝寺が所有し

たものを、天保三年（一八三二）、本源寺が譲り受けて以来、二百年近く保管されてきたものである。その中で「中阿含経」は計二九帖ある（巻二・五〇・八・一〇〇・一三・一五・一六・一八・二二・二五・三一・三二・三四・三九・四二・四四・四七・四九・五〇）。ただし虫食いや破損がひどく保存状態は大破か不良という状態にある。昭和五三〜五四年にかけて、同朋学園仏教文化研究所による「本源寺宋版一切経調査」が行われ、報告書も刊行されているので、詳しくはそれに譲るが、計二九帖のうちかなりが東禪寺版（崇寧蔵）であること、巻三九の巻首題記に「紹聖三年五月」とあること、巻四七・四九・五〇に「広東運使寺正曾醜」の名が見えること、ほとんどの巻に三聖寺の朱印があり（ないのは四帖のみ）その形状も同一であること等により、愛大本は本源寺本ともとはワンセットのものだったと分かる。ちなみに、本源寺の宋版一切経は、昭和五八年、愛知県指定文化財を受けている。

邢東風助教の調査したこのほかの宋版「中阿含経」の調査結果の概要は、以下の通り。

京都大学人文科学研究所蔵宋版「中阿含経」

南宋の資福蔵（圓覚蔵ともいう）のもので、計九巻を蔵す。一紙五折り、六行、一七字。巻四（全二紙）、巻七（全三紙）。巻一四（全二〇紙）、巻一六（第五紙から第二十二紙まで計一八紙）、巻一九（全二二紙）、巻二〇（全一六紙）、巻二一（全一二紙）、巻二二（第二紙から第十六紙までの計一五紙）、巻二七（全一六紙）。

愛大蔵の宋版「中阿含経」とはだいぶ異なる。

おわりに

最後に、印刷の歴史上から見た愛媛大学蔵宋版の意義を考えてみたい。中国印刷史を概略すると、まず印璽や印章で捺するという素朴な方法から始まり、ついで隋末〜唐初の頃になると刷るというアイデアが誕生。それは石碑に刻された文字をそのまま拓本にとるという発想としてスタートした。現存する最古の拓本は、敦煌出土の「温泉銘」などである。やがて見やすく小型化された木版印刷術が誕生。その世界最古の印刷物は、製作年代が明確なものとしては、日本の「百万塔陀羅尼経」があり、宝亀元年（七七〇）四月完成で法隆寺蔵である。また不明確なものとしては、韓国の「無垢浄光大陀羅尼経」があり、慶州の仏国寺の釈迦塔から発見された。およそ七五〜数年内のものと推定される。年紀の明らかな中国現存の最古の印刷物は、唐・懿宗の咸通九年（八六八）「金剛般若波羅密教」である。

発明直後の木版印刷は、民間や寺院が利用するだけで支配階級は重視しなかったが、五代十国の頃に中国の印刷文化隆盛の基礎が作られ、木版印刷が注目されるようになると、はじめて政府が関わるようになってくる。が、現存するものはきわめて稀である。もつとも有名なが、後唐の宰相・馮道（八八二〜九五四）の「九経」などである。能書家に版下を書かせ、版木彫りの名工を集めて開板を行わせた。二二年かかった。これが中国の儒教経典の最初の印刷にして、勅版の始まりである。ただし、その本は伝わらない。

北宋の太祖・趙匡胤（在位、九六〇〜九七六）は、開宝四年（九七二）、蜀の成都で「一切経」を開板させ、一三年かかって第二代太宗の太平興国八年（九八三）に完成。「蜀版一切経」と称される。この版木を首都の汴京に移して印刷、中国最初の官板「一切経」の出現である。それは中国の各寺のほか、高麗や契丹・日本にも分けられた。

日本には、東大寺の齋然(ちよねん)(九三八―一〇一六)が入宋し、帰国する際、太宗に謁見したときに下賜されたが、現在は伝わらない。この「蜀版一切経」は、第六代神宗の熙寧四年(一〇七二)のときに、再度印刷されている。その一部が、京都の南禅寺(「仏本行集経」巻第一九)と東京の書道博物館(同様の遺巻)に蔵されている。

これに刺激されて、以後各地で私版の「一切経」が印刷。神宗の元豊三年(一〇八〇)、福州の東禅寺等覺院で解板、五年かかって第八代徽宗の崇寧二年(一一〇三)に完成。これが東禅寺版であり、また崇寧蔵ともいう。徽宗の政和二年(一一二二)から南宋初年の第一〇代高宗の紹興二年(一一五二)にかけて、福州の開元寺で解板。これを開元寺版といい、また毗廬蔵ともいう。その他、思溪版(浙江省湖州)、磧砂版(江蘇省呉県)などもある。愛媛大の宋版は、歴史的にはこの線上に位置する。

今日、北宋刊本と見なせるものはごく少なく、仏典以外では一〇点程度しか現存しない。理由は、(一)長い年月が経ったということ、(二)北宋が金に制圧され、第九代欽宗の靖康の変(一一二七)に際して、版木や印刷書などが略奪され、北に持ち去られたことにもよる。たまたま南宋に残ったものは、覆刻に使用されて原形を留め得なかったのだから。版木の彫り方だが、何人かの刻工が共同で行う。一つの巻の初めから二丁三丁ずつ受け持ち、一日で一人の刻工が一丁半から二丁彫るとして、刻工一〇人ではかかればみな腕のよい職人ばかりなので、一巻三〇丁前後なら一日半から二日で彫り上げる。彫り賃は字数によって支払われる。宋版の刻工者の氏名は、長澤規矩也の「宋刊本刻工名表初稿」「宋刊本刻工名表」(『長澤規矩也著作集』第三巻「宋元版の研究」(一九八三)などに計一、七〇〇人を掲げているが、張秀民はさらに七〇〇人を追加(前掲『中国印刷史』)、その全体像をより詳細にしている。また版下はふつう能筆の同一人物が書くが、これ

を写工といい有名な文人が書くことはほとんどない。以上のような印刷史から見て、宋代に出版された宋版「一切経」が、東アジアに伝えられた「唐物」のうち、仏教経典の集大成したものとして代表的な遺品であり、また中国の教典出版事業の実態および日中の文物・文化交流の理解に寄与する所大であるのは論を俟たない。

以上を総ずるに、愛媛大学所蔵宋版一切経は、「宗鏡録」巻二二が、南宋時代一二世紀前半頃に開元寺で印刷され(毗廬蔵)、また「中阿含経」巻五六は、同末頃に東禅寺で印刷された(崇寧蔵)貴重なものである。ことに「宗鏡録」巻二二は、鎌倉時代中期、弘長元年(一二六一)に、金沢文庫を創建した北条実時自身が中国に使者を使わし求め、一門の菩提寺である称名寺に寄進したものの一部という、歴史的にもう一つの由緒を有する。現在、わが国の書誌学の第一人者である慶応大学斯道文庫の高橋智氏とたまたまこのことを話した折、「ドラマですわね」と言われたことが強く印象に残っている。金沢文庫は、この「宗鏡録」も含めて宋版一切経すべてについて国の重要文化財の指定を受けているが、金沢文庫・宮内庁所蔵の宋版「宗鏡録」に比べても、愛媛大学蔵は保存状態がよく貴重な文化財であり、資料的価値が高いと結論づけることができる。

最後に付言したい。今回、愛媛大学と中国社会科学学院の何梅教授、および「大蔵経」史研究の第一人者・方広鎰教授らとの連携協力により、宋版仏典の調査が行われたことは、まことに時宜にかなったものである。その仲介の労をとった愛媛大学の邢東風助教授、ならびにそれを支援した愛媛大学附属図書館の意欲的な姿勢を、ここに特に記しておくものである。